考古学研究所アルカ提供

Archaeological Laboratory,Co.,Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.143
2015.8.1

＊考古学研究所（株）アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

田舎考古学人回想誌 44

「地域の調査に協力 北原遺跡は磨製石鏃製作工房」

神村 透

中央道遺跡調査をしながら合間をみて地域の要望で幾つかの遺跡を調査した。飯島町赤坂遺跡は千人塚公園への道の切通しに黒土の落ち込みがあって、見ると縄文早期立野式の押型文土器があった。教育委員会と相談して発掘調査をする。小竪穴と石囲い炉が検出され、押型文土器も多くあって立野式土器を追っている私にとって興奮させられた遺跡でした。結果は遮那藤麻呂君が長野県考古学会誌に報告した。

私が弥生土器に取り付かれたかキッカケとなった遺跡―高森町北原遺跡に住宅団地が計画され、昭和46年国庫補助金事業で高森町教育委員会が緊急発掘することになり、47年1月に私が調査指導し中央道遺跡調査団が協力して調査した。竪穴住居址9軒検出し、内7軒が弥生中期後半の北原式土器の時期で、多量の土器・石器がこの時期の生活内容を明確にする資料となった。

住居址は県内では伊那地方だけの長方形プランで東海地方との繋がりを示す。土器は殆ど破片であるが、壷・甕・鉢・台付甕がセットで高杯は無い。中で壷・甕が多く、壷の多いのが目立つ。この点後期の壷の少ないあり方の違いが特徴的で、貯蔵容器としての必要性があった。台付甕は大小あって、受け口口縁となっている。胴部の下に開くコの重ねの文様は北信の栗林式土器にも見られる。石器は多種多様で、大陸系石器の蛤刃磨石斧や片刃石斧もあるが、打製の耕具・収穫具が多い。これは下伊那地方特有の在り方で段丘地形のもたらす陸耕(畑作)を示す。石器群の中で注目されるのは磨製石鏃未製品と製作のための工具の存在でした。

▲磨製石鏃制作工程（北原遺跡）

北原遺跡の磨製石鏃と未成品の出土は大正時代から注目されていた。が、それは郡史調査で郡下の遺跡を悉皆調査した市村咸人先生の野帳の中の記録の中だけでした。先生は「未成品と覚しく無孔のものがあり、また孔のあけかけの凹みを有するものもあり、これらを適当に配列して比較すれば其製造工程の順序を想像し得べく」と書いている。私も高校生のとき北原遺跡の遺物採集に夢中になり、石器の中に磨製石鏃の未成品を採集し市村先生と同じく製造工程に気付いた。それを原石採集―剥片割取―打調成形―磨製成形―穿孔―完成という工程を昭和25年『諏訪考古学』に発表した。

発掘した住居址で遺物の多い6軒でみると石鏃未成品は計217点平均36点、敲打器21点平均3.5点、砥石20点平均3.3点、台石5点平均0.8点、石錐3点平均0.5点とどの住居址からも未成品と工具が出土していて集落全体で製作していた。北原遺跡は磨製石鏃の工房であることを示していた。近接する恒川遺跡で未成品127点と下伊那では多い。松本平では和手遺跡44点　竹渕遺跡59点　県町遺跡32点が多い。善光寺平では松原遺跡で209点が北原遺跡より多いが、調査住居址数の多い点出土点数が多いのは当然である。

平成17年　下市田一区の集会場建設で高森町教育委員会が北原遺跡を発掘調査した。取付け新設道路と共に弥生中期後半の住居址を30軒検出している。報告書が出来ていないので分からないが、磨製石鏃の未成品が多く出土したという。担当者の所見として北原遺跡には中期後半の住居址が100軒以上存在したのではという。遺跡地図での北原遺跡の範囲は東西150m、南北350mの広さで下伊那地方最大の集落である。この遺跡全体で磨製石鏃を製作していたと考えると、その製作点数は莫大な数になる。私がいう北原型磨製石鏃は有抉単孔の磨製石鏃でそのタイプは中部高地から関東に分布する。交易品として製作したのだろうか？この時期は下伊那の櫛描き文の北原式土器文化と東北中信の縄文施文の栗林式土器文化との対峙の中での戦争を意識しての磨製石鏃製作とも考えられる。果たしてどちらだったのでしょうか？北原遺跡の在り方を大事に考えたい。石器製作工房の遺跡なのに学界から注目されていないのが残念である。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目　次

■田舎考古学人回想誌　地域の調査に協力　北原遺跡は磨製石鏃製作工房　神村　透 …1
■考古学の履歴書　過ぎし日の軌跡―女として考古学研究者として―（第7回）岡田淳子 …2
■リレーエッセイ　マイ・フェイバレット・サイト（第136回）水戸部秀樹 …3
■考古学者の書棚　「陶磁の道 ―東西文明の接点をたずねて―」　藤田慎一 …4

考古学の履歴書

過ぎし日の軌跡 ー女として考古学研究者としてー(第7回)

岡田 淳子

⑦20代後半の焦り

研究仲間たちは、20代後半が勝負の時だと言っていた。しかし、20代後半の私はいったい何をしていたのだろう。研究成果にオリジナルなものは何もない。

修士を終わった時、取得単位数も成績も充分なので、このまま研究を続けてはどうか、と言ってくださった先生もいたが、私は就職を考えていた。ところが生物系研究科に移ったため、修士を出ても高校社会科一級の教員免許が得られず、次の場所が決まるまで考古学整理室の隅に置いてほしいとお願いしていた。そんな時、明治大学の博士課程に入学することを条件に、杉原荘介先生が、考古学陳列館の嘱託として週4日仕事をするように手配してくださった。私はまたも学籍をもち、戸沢充則さんと同級生になったのである。嘱託はとても有難くて、ガラスケースを磨いたり、本をきれいに整理する仕事も機械的とは言えず、生甲斐につながる仕事でもあった。

発掘にも参加した。大塚初重先生に従って「東京都伊豆七島の文化財調査」に加わり、三宅島(みやけじま)と利島(としま)の調査をお手伝いしている。三宅島の北から南まで移動し、人は次の陸地が見えるとそこに根を張り、やがて次の島へ移って行くのだと確信した。

その夏は連日の晴天に、天水を頼りの島の生活が危機を迎えていた。宿舎を提供してくださった漁家のご主人が、明日は最後の日なので海へ出てトコブシを焼いて食べようと、招待してくださったのに、その期待をよそに翌日は「雨乞い」の行事をすることになった。できれば私も雨乞いに参加したかったが、女人禁制。やがて、三宅島の雄山(おやま)の稜線に人の列が見え、次に山頂から一筋の煙が真っ直ぐに昇っていった。アジアの雨乞いには二つの型があり、一つは火を焚くもの、もう一つは銅鼓でカエルの鳴き声を出すものである。火を焚く方が上昇気流を生じるので、少しは理に叶っているように思う。

私たち調査隊は、撤収を始めていた。雨乞いの効果もあってか、やがて雨が降り始め、一行が台風の前触れの中を伊豆大島へ、そして利島へ渡るころにはかなり風が激しくなっていた。1958年当時の利島には船着き場が無く、175トンの小型船でも接岸できないので、艀(はしけ)で上陸した。海軍で鍛えた大塚先生はさすがに元気、でも若い男性陣は船酔いでみな参っていた。乗り物酔いを経験したことの無い私は、大塚先生の片腕となって荷物の上げ降ろしに奮闘したつもりである。

台風一過、やっと晴れて発掘作業を始める。火山島はあんなに降った雨が、さっと海に流れ落ち、自然のままなら災害にならないことも知った。

▲チャード先生来日(前列中央)、右端が大場利夫氏、北大にて(1964.9.7)

敷石床の竪穴遺構を掘った。地震の為か床は平らではなく歪んでいたが、敷き詰められた板状石の中央には甕型土器が配され、時期は縄文後期の初頭、称名寺(しょうみょうじ)式であった。南関東のものと大へんよく似ており、文化のつながりが感じられた。この遺跡についての整理と研究は、戸沢さんに任せられた。寒い時期になって、埼玉県の五領(ごりょう)遺跡の発掘も手伝った。包含層には畑の畝が残るほど地表から浅いところに住居遺構が多数発見され、発掘実習の後輩たちは、指導を手伝った私を、親しさを込めて鬼軍曹のように語っていた。当時、私の興味の中心だった古式土師器を多数発掘したが、これについての研究は地元の研究者にゆだねられた。

この間に私が業績らしいものを残したとすれば、英文の学術雑誌「Arctic Anthropology」に「日本の旧石器文化」を解説したものくらいである(Vol.INo.1所載)。これは、企画をしたC.S.Chard(チャード)氏、英訳をしたH.Befu(ベフ)氏、原稿を書いた私の三人の連名で発表された。チャード先生は、東北アジアの考古学を専門にされロシア語はもちろん、米国政府の施策で日本語も学び、結構分かっていらした。けれど日本語を母語とする者に任せる方がよいと、このような方法を取られたのだと思う。ベフ(別府)さんは帰米二世で優秀なバイリンガルの研究者、当時チャード教授の助手をしていた。別府さんはその後Ph.Dを終えてスタンフォード大学に迎えられ、外から日本社会の特徴を復元されるという際立った業績を残された。私は1950年から60年までの10年間に日本で発表された先縄文遺跡の報告書・研究論文をほとんど集めて読み、400編余の要旨を書いたが、これは研究と言えるようなものではない。

当時はすべて手書きだったので、読んだ本と要旨の原稿は荷造りをして米国へ送ったが、空き時間は連日この仕事に費やしていた。後に、この方式を良いと思われたのか、チャード先生は北海道の考古学についても同じような文献解題を手掛けられ、私は引き続いて700編余の要旨を書き続けた(Vol.ⅣNo.1所載)。

3年目には、これも杉原先生の考えで平凡社に通い、当時流行った大系物の内『日本考古学大系』弥生文化の巻の編集を一年間手伝った。これも研究ではない。ただ専門以外の人に如何に考古学の細かいひだを理解してもらうか、そして一流出版社の編集・校正の技術と精神を学んで、財産として身に着けることができた。

略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等女学校　卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校　卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学)　卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961～64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964～66年	米国ウィスコンシン大学人類学部　研究員
1967～77年	国立(クニタチ)音楽大学　専任教員
1978～88年	北海道大学理学部・文学部　専任教員
1988～2004年	北海道東海大学国際文化学部　専任教員(1998年より特任)
2010年～現在	北海道立北方民族博物館　館長(非常勤)

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト136
押出遺跡 ～山形県東置賜郡高畠町～

水戸部 秀樹

押出遺跡は、縄文時代前期後半（約5,800年前）に属する、湿地の縁辺部に営まれた集落遺跡である。これまで第1次から第5次にわたる発掘調査（第1～3次：山形県教育委員会，第5・6次：公益財団法人山形県埋蔵文化財センター）が行われ、発掘調査報告書の刊行まで至っている。出土した漆塗りの土器・木器、検出した遺構などは大変貴重なものであったため、全国的にも有名な遺跡となった。第1～3次調査は1985年から1987年にかけて国道13号南陽バイパス建設にともなって行われた。調査面積は4,000㎡である。また第4・5次調査は、2011・2012年に沼尻堀排水路改修工事にともなって行われた。調査面積は1795㎡であるが、その3分の2は沼尻堀排水路設置により、すでに失われていた。

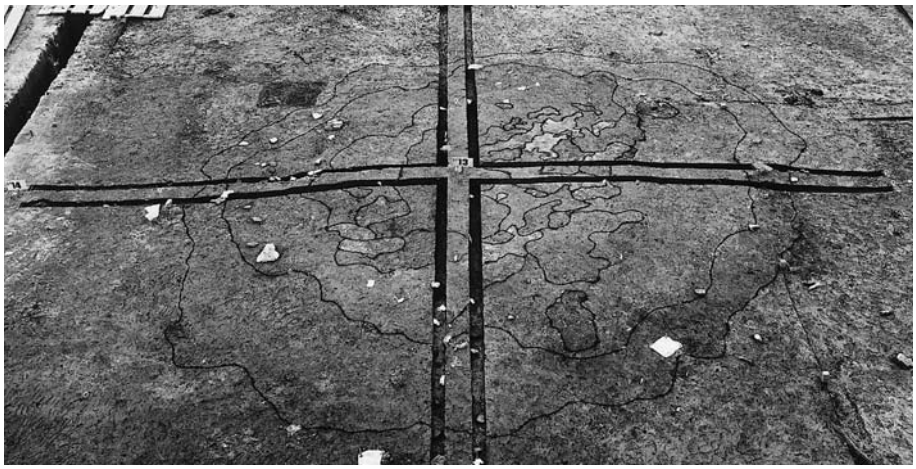
第1～3次調査で出土した彩漆土器や各種土器・石器、木製品やクッキー状炭化物などの有機質遺物は、その重要性が認められ1,000点以上が重要文化財へと指定されている。もちろん第4・5次調査でも、同様の遺物が多数出土している。これらの彩漆土器は、「世界最古の漆工芸」として、世間を賑わせたようであるが、現在では早期の垣ノ島B遺跡（北海道函館市）にその座を譲っている。当時私はまだ中学生であり、考古学に対する関心も今にして思えば皆無であったようで、地元の遺跡から数々の新発見がなされていたことなど露とも知らなかった。

そんな私が第4・5次調査を担当することになったが、前回に比べて調査面積も小さく、沼尻堀の両端を細長く掘り下げるだけの調査であるため、まずは新発見よりも従来の調査成果を再確認することに努めることにした。湿地であるため毎日泥まみれになり、積雪、融雪による水没などの困難にも遭遇した。いくつかの遺構写真が積雪状態になってしまったのが心残りではある。

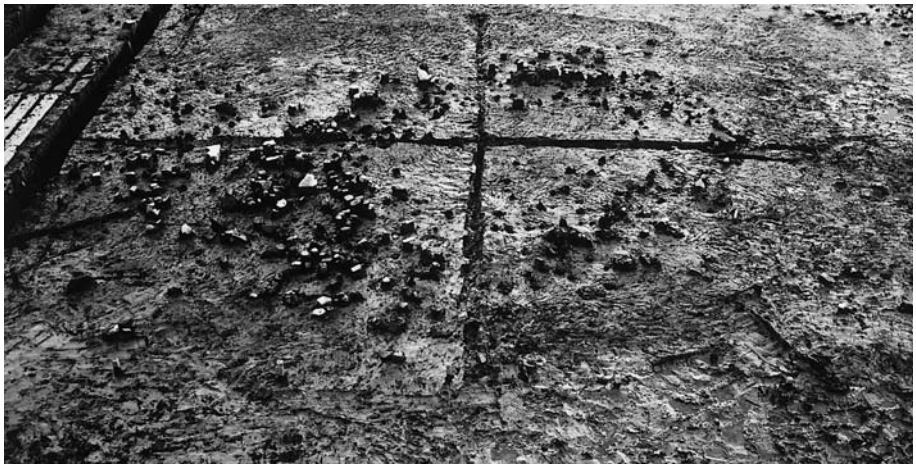
調査の翌年に報告書を刊行することとなり、図面や写真などを順調に揃えていったのであるが、いざ原稿執筆となった時に、従来の調査所見を大幅に見なおさざるを得ないことに気がついた。押出遺跡の住居には平地、あるいは盛土上に壁柱を打ち込みその上に屋根を載せるという復元案が提示されている。確かに遺跡には、無数の柱が円形あるいは楕円形状に並んで打ち込まれているものもある。ところが第4・5次調査の成果によると、平地式の住居を建てたとする地山面上には、遺跡の西側を流れる吉野川からの氾濫によるものと考えられる砂粒が検出されており、これでは住居は水浸しとなる。さらに第1～3次調査の報告書の写真を見ると、盛土上面では打ち込まれたはずの柱の痕跡がほとんど見当たらないにも関わらず、盛土を除去すると無数の柱が姿を現す。順序立てて考えれば、先に柱を打ち込み、その後に盛土を載せた事になる。つまりこれまで住居の柱と考えられていたものは、実際は盛土を安定化させる地業として打ち込まれた杭であったのではないだろうか。

これまで見つかった杭、盛土は何のためのものだったのか、住居はどこにあったのか、どのような住居に住んでいたのかという新たな課題が浮上した。これまでの資料を再検討し、他遺跡との比較も行いながら、新たな集落像を一から再構築してみたいと考えている。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは須賀井新人さんです。



▲13号住居の盛土検出状況



▲13号住居の盛土除去後の状況

考古学者の書棚

「陶磁の道　－東西文明の接点をたずねて－」

三上次男 著／岩波新書（1969）　　藤田　慎一

最近、ネット通販やネットオークションで古書の購入することが多くなっているが、学生時代は古書店をめぐって本を買うことが多かった。通っていた大学が京都で堺に住んでいため、京都や大阪の古書店を帰りに立ち寄り本を探すのが日々の通学スタイルでした。

そして、大学では日本史より世界史のほうを得意としていたので東洋史学を専攻した。入学したての頃は清朝末期の洋務運動や変法運動などの近代史を勉強したいと思っていたが、ある時、考古学の世界に誘われたきっかけとなったのがふと立ち寄った古書店の片隅で見つけた表題の本である。家から大学へは実家のある堺市から京都市内まで2時間近く鉄道で移動、その通学時間を古書店で購入した本を読むことに充てていた。本書は新書版で値段も手ごろなので車中での暇な時間を潰すために選んだ本であった。学生時代からでも初版が出されて25年経っていたが、大学に入りたての学生にとってはかなり新鮮であり、陶片から交易状況や文様等の文化交流などが明らかになることに非常に衝撃を受け、考古学に興味をもつきっかけにつながったのである。今にしてはこのようなことは至極あたりまえになりすぎているが漢文史料など文献研究主体の授業が多かった東洋史学専攻のなかで、とても斬新な研究にふれたと感じたのである。

話は表題の本のことに戻す。著者である三上次男（1907－87）は北東アジア史、東洋考古学の研究者であり、「金代女真の研究」や「満鮮原始墳墓の研究」、「金史研究」などの著作でも知られている。また、貿易陶磁史の分野を開拓したことでも知られ、この「陶磁の道」の刊行以降、有田、九谷などの窯跡調査、日本貿易陶磁研究会など一連の陶磁史研究の発展にも大きな業績を残している。

本書の内容はエジプト、東アフリカ、中東、インド、東南アジア各地で出土、伝世した陶磁器をとりあげ、陶磁の道という東西交易、文化交流の様相を描き出している。「一　遥かなるエジプトの地の中国陶磁」ではエジプトのカイロ近郊、フスタート遺跡をとりあげ出土した中国陶磁や中国陶磁を真似たエジプト在地の陶器を紹介して、交易や文化交流の一端を紹介している。ちなみにフスタートで出土した陶磁器は出光美術館の陶片室にも一部展示がなされている。このあと、「二　東アフリカと東洋の陶磁」、「三　アラビア半島に運ばれた東の商品」、「四　イスタンブールのトプ　カプ　サライ博物館」、「五　東地中海沿岸よりメソポタミアへ」、「六　ペルシアにもたらされた東方の陶磁」、「七　インダス河口の廃港にて」、「八　南海の青磁」、「九　東南アジアの中国陶磁」とつづき、合計九つの章で各地の遺跡で出土した陶磁器や博物館に収蔵されている伝世品のほか、中国で書かれた地理書、イスラムの旅行記なども紹介しつつ平易な文章でわかりやすく陶磁器を通じての交易、交流だけでなく、中国陶磁の各地への浸透状況も含め海上の東西交易路の様相を詳細に描き出している。

最後の「一〇　陶磁の道」では海上の東西交易路の変遷を簡潔に述べ、この章の最後に三上は締めで以下のように述べている。

「いずれにせよ、中世の東西世界に渡された一本の太い陶磁のきずな。それは同時に東西文化を交流させるかけ橋でもあったが、この海の路をわたくしはしばらく「陶磁の道」と呼ぼうと思う。」

とあり、陶磁器の出土や伝世によって世界史レベルの事象まで明らかになるところに学生当時、魅力に感じ、漢文は今ではあまり読めなくなってしまったが漢籍史料も勉強しつつ考古学もという感じで学生時代は過ごすこととなったのである。

本書は、私にとって考古学という分野に飛び込ませていく端緒となった本である。大学から大学院、公共の嘱託職員、民間調査機関の発掘調査員として発掘調査に従事していく中、業務上、中国陶磁にめぐまれる機会がなく、弥生土器や木製品に興味がいってしまったこともあり、陶磁器研究に取り組めていけなかった。

今年度から岩国市教育委員会で埋蔵文化財担当の専門職員としてのスタートを切った、しばらくは中世城館をはじめ中近世の遺跡調査が続く予感、陶磁器にもふれる機会が増えてくれればと願いたい。そうなれば、さすがに世界史スケールで考えることは出来ないが、少しは陶磁器研究に取り組める機会が出来ると期待しつつ、本書を読み返しながら思いをはせている。

アルカ通信　No.143

発行日　2015年8月1日
企　画　角張淳一（故人）
発行所　考古学研究所（株）アルカ
〒384-0801　長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp　URL：http://www.aruka.co.jp